



Title	婚姻満足度の規定要因としてのコミュニケーション : 国際結婚夫婦を対象としたカップル単位の分析から
Author(s)	施, 利平
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 159-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3899
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

婚姻満足度の規定要因としてのコミュニケーション

——国際結婚夫婦を対象としたカップル単位の分析から——

施 利平

〈要旨〉

国籍及び文化背景が異なる者同士の婚姻を「国際結婚」と定義し、一方は日本人でもう一方は外国人である日本在住の夫婦を調査対象とし、これらの国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの構造及び婚姻満足度を、筆者が一九九七年に行った調査から得られたデータを用いて分析した。国際結婚夫婦のコミュニケーションの特徴であるが、夫日本人・妻外国人夫婦は妻日本人・夫外国人夫婦よりもコミュニケーションが活発で率直であり、コミュニケーションの情緒的共有も高い。そして前者の夫婦は後者より夫も妻も婚姻満足度が高い。さらに、夫の婚姻満足度は夫側のコミュニケーションの側面である「夫のコミュニケーションの情緒的共有」と「夫のコミュニケーションの率直さ」によって規定されるが、妻の婚姻満足度は妻側の側面である「妻のコミュニケーションの情緒的共有」、「妻のコミュニケーションの量」に規定される以外に、夫側の側面である「夫の言語コミュニケーションへの意欲」によっても規定されることが明らかになった。

キーワード

国際結婚、コミュニケーション、婚姻満足度、摩擦、情緒的共有

はじめに

本研究の課題は次の二つである。第一に、現在増加している日本在住の国際結婚夫婦のコミュニケーションの構造を明らかにすることである。第二の課題は、このコミュニケーション構造が夫婦の婚姻満足度と与える影響を分析することである。

国際結婚夫婦にとって、コミュニケーションはとりわけ重要な事柄である。国籍を同じくする夫婦でも、夫婦間コミュニケーションは夫婦関係の改善・強化・婚姻の満足度を規定する大きな要因として位置づけられ、その重要性が強調されている(木田、一九八七／近藤、一九九八／Fitzpatrick 1989, Navran 1967, Blood 1967, Michel 1978)。まして、結婚するまで異なった文化背景で生まれ育ち、違った言葉、習慣、異なった思考及び行動様式を持っている男女が夫婦となる国際結婚家庭では、同じ文化圏出身者同士の夫婦以上にコミュニケーションが必要である。しかし一般には国際結婚家庭ではコミュニケーションは困難になりがちであり、言葉と文化の壁が夫婦の意思疎通を困難にしている。

では、実際に国際結婚夫婦のコミュニケーションはどんな構造を持ち、またコミュニケーションのどのような側面が夫婦の婚姻満足度を規定しているだろうか。

また、従来のコミュニケーション分析は個人に焦点を当てたものが多いが、本研究では夫婦間コミュニケーションによって、夫婦間

の伴侶性・関係性が築かれ、高められ、個人としての男女を家族として仕上げていくという視点に立ち、夫婦を分析単位とし、国際結婚夫婦のコミュニケーションの量、率直さ、コミュニケーションの摩擦、コミュニケーションの情緒的共有などの諸側面を調べた上で、国際結婚夫婦のコミュニケーションの特徴を夫日本人・妻外国人夫婦と妻日本人・夫外国人夫婦の二タイプに分けて明らかにし、更にコミュニケーションのどのような側面が婚姻満足度に影響しているかを分析した。

1. 仮説と調査方法

(1) 質問項目と仮説

本研究では特にコミュニケーションの量と質に焦点を当てて分析する。

これまでの実証研究では、竹下(一九九七)が妻日本人・夫外国人夫婦の満足度に焦点を当てて調査を行い、コミュニケーションに問題が少ない家庭では日本人妻の満足度が高いという結果を得ている。しかし、コミュニケーション問題が少ないことが何を意味するのかに関しては、コミュニケーションの持つさまざまな側面まで分けて研究していない。また、日本人夫婦についての研究ではあるが、福里(一九八八)は夫婦のコミュニケーションは、「人の血液」に例えることが出来ると述べ、コミュニケーションの量と質は夫婦の婚姻満足度に大いに関係していると、その重要性を指摘している。一

方、木田（一九八七）の研究によると、コミュニケーションの質が高い家庭では、家庭生活における夫婦間の共同活動が多く、夫婦間の理解が高いが、コミュニケーションの量（頻度）と「相互理解」との間には一貫した関連が見られずと報告している。これは、コミュニケーションの量と質を区別すべきことを示唆している。

それで本研究では量と質に焦点を当て、以下述べるような四つのグループに分けて質問項目を作成した。第一のグループはコミュニケーションの量的な側面を、第二から第四グループはコミュニケーションの質的な側面を測るものとする。表一は夫婦間コミュニケーション構造の分析に用いる質問項目の内容と尺度をまとめたものである。

まず、項目一から四はコミュニケーションの量に関する項目である。会話の印象に関する項目四は木田（一九八七）の用いた質問項目を修正したものである。

コミュニケーションの量と婚姻満足度の関係に関しては福里（一九八八）の指摘に従い、仮説一を立てる。

仮説一：コミュニケーションの量が多ければ婚姻満足度が高くなる。

次に、質問五から八は自己開示に焦点を当てている。ここでは主に Rorich（一九八八）の自己開示概念を、コミュニケーションの率直さに構成し直して用いた。言うまでもなく、国際結婚夫婦は言語能力や相手文化への理解が不足している可能性があるため、意志

疎通の困難を克服するために、言語コミュニケーションを用いて率直に自分の考えや気持ちを配偶者に伝えることがとくに重要であると考えられる。また、ホール（一九七六）は、文化を大きくハイ・コンテクスト文化とロー・コンテクスト文化の二つに分け、日本文化はハイ・コンテクスト文化であると指摘している。ハイ・コンテクスト文化に所属する人々は意思疎通をするとき、表現された言語よりもコンテクストに大きく依存する。コミュニケーションにおいて自己を相手に開示するときの言語表現への依存度は明らかに文化によって異なってくる。もしハイ・コンテクスト文化に属する日本人配偶者が家庭の外のように家庭の中でもコンテクストに高く依存するコミュニケーション形式をとるようであると、意思疎通が一層困難になると予想される。以上の観点から、本研究で自己開示の仕方を、言語コミュニケーションにおける率直さによって測定することにした。

仮説二：言語コミュニケーションにおける率直さが高いほうが婚姻満足度が高い。

三番目のグループは、相手に対する情緒的な共有であり、これには傾聴、理解（意味と感情の理解）、共感が含まれる。傾聴は相手に安らぎを与え、夫婦関係を幸せにする最も基本的なもの（福里一九八八）である。そして、コミュニケーションによって夫婦はお互いに情報と情緒を交換し（佐藤一九九二）、夫婦間の共感を高めていくと考えられる。このグループの質問項目は質問九、十、十一、十二

表1 質問項目の内容と尺度の一覧表

質問文	略語	尺度
1 あなた達ご夫婦は日常的に夫婦の会話はどのぐらい行われていますか	会話の程度	「2人でよく話す」を3、「どちらか一方は話したいがもう一方は必要最小限のことしか話さない」を2、「2人ともお互いに必要最小限のことしか話さない」を1
2 現在の会話の量は十分だと思いますか	会話の量	「十分」を4、「ほぼ十分」を3、「やや不足」を2、「不足」を1。
3 あなた達ご夫婦の間にただの世間話や雑談をすることはどのぐらいありますか	雑談	「よくある」を4、「時々ある」を3、「あまりない」を2、「ない」を1。
4 あなたは御主人（又は奥さん）と会話をするとき、話が弾んだり、一緒に笑ったり、じっくり話し合ったりするようなことがありますか	会話の印象	同上
5 夫婦の間で会話をするとき、言葉で明確に自分の考えや意志を伝えるべきだと思いますか	伝える意志	「そう思う」を4、「どちらかと言えばそう思う」を3、「どちらかと言えばそう思わない」を2、「全くそう思わない」を1。
6 あなたは普段思ったことを発言しますか	発言	「よく発言する」を4、「時々発言する」を3、「あまり発言しない」を2、「発言しない」を1。
7 あなたは自分の気持ちをありのままに伝えますか	ありのまま	「伝える」を4、「大体伝える」を3、「あまり伝えない」を2、「伝えない」を1。
8 あなたは自分の考えや意見を明確に伝えますか	明確	同上
9 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの話に十分耳を傾けていると思いますか	傾聴	「そう思う」を4、「大体そう思う」を3、「あまりそう思わない」を2、「そう思わない」を1。
10 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの言っていることの意味を理解していると思いますか	意味理解	同上
11 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの発言に込められた気持ちや感情を理解していると思いますか	感情理解	同上
12 あなたは御主人（又は奥さん）と喜びや悩みを分かち合っていますか	共感	「分かち合っている」を4、「大体分かち合っている」を3、「あまり分かち合っていない」を2、「分かち合っていない」を1。
13 あなたは御主人（又は奥さん）と文化や習慣などの文化的違いのための口喧嘩の頻度は次のどちらですか	口喧嘩の頻度	「ない」を4、「あまりない」を3、「時々ある」を2、「よくある」を1。
14 口喧嘩しなくても文化的な違いのため傷つくと感じる頻度は、次のどちらですか	傷つく頻度	同上

である。

仮説三…情緒的共有が高ければ婚姻満足度が高まる。

そして、最後のグループは摩擦に関する項目である。国際結婚家庭で文化に由来する摩擦が多く存在していることは諸研究（ボスバーク、一九八九／佐藤、一九八九／新田、一九九二）が指摘する通りである。本研究ではこれを口喧嘩と傷ついたと感ずる頻度から捉えることにした。

仮説四…コミュニケーションにおける文化的な摩擦が少なければ、婚姻満足度が高くなる。

(2) 調査の実施

調査対象は、現在日本で結婚生活を送っている日本人と外国人との夫婦である。「国際結婚を考える会」^③、大阪府国際交流センター及び大阪府のいくつかの日本語教室、ボランティアグループの協力を得て、それぞれの会員（又は参加者）とその配偶者に質問紙調査を依頼した。

実施期間は一九九七年七月から質問紙を配布し、九月に回収を締め切った。

調査方法は郵送法による質問紙調査である。質問内容をよりよく理解してもらうために、日本語、英語及び中国語の三種類の質問紙を用意し、それぞれの夫婦が最も得意な言語を選択し、回答してもらった。

なお、夫と妻の意識の違いやプライバシーを考慮し、同じ内容の質問紙に、回答者夫婦に別々に答えてもらい、別々に返信するように依頼した。夫と妻の質問紙が別々の封筒で返信され、更に夫と妻の質問紙が揃ったものを有効な標本一ペアと見なした。質問紙の配布数は三八九ペアで回収率は二四%、有効回収数は九五ペアであった。この回収数と回収率は①夫だけ又は妻だけの単独の標本、②外国人側配偶者は日本で生まれ、日本で教育を受けた在日外国人、③海外在住の者を、除いた結果である。

(3) データの特性

本研究では表一で示した十四の質問を夫と妻にそれぞれ行い、夫と妻の回答をあわせての二八項目を因子分析に用いる。その理由は、コミュニケーション行為は相互行為であり、当事者だけのものではなく、他人の態度や行動からも多く影響を受ける性質を持つものであるため、夫のコミュニケーションは妻に影響され、また妻の夫に影響される可能性が考えられるので、夫婦間コミュニケーションの中でお互いに影響される部分、つまり夫妻の相互行為をみることにこの分析の狙いの一つでもある。もちろん夫と妻それぞれのコミュニケーションを分析するのも重要ではあるが、もし夫と妻のものを単独で分析すると、夫婦間の相互的コミュニケーション行為がみられないであろう。更に、夫婦の婚姻満足度は夫婦相互のコミュニケーション行為によって規定されるという前提に立ち、本研究では以上述べたような分析方法を採用した。

有効回答九五ペアの夫婦のうち、夫日本人・妻外国人夫婦は三二ペアで、妻日本人・夫外国人夫婦は六三ペアである。前者のうち、日本語を夫婦の使用言語として使う夫婦は二二ペア、英語を使うのは六ペア、その他の言語を使うのは四ペアである。一方、後者のうち、同じく日本語を三一ペア、英語を二九ペア、その他の言語を二ペアが使っている。

年齢に関しては夫が三十代と四十代に集中し、妻が二十代から四十代に集中している。夫の学歴は、中学・高校卒十五・八%、短大卒・大学中退十一・六%、大学卒三三・七%、大学院三五・八%、その他は三・二%で、妻の学歴は同じく二二・一%、二六・三%、四〇・〇%、一一・六%と、夫婦とも全般的に学歴が高い。夫の職業は、常用被雇用者四六・四%、自営業・自由業四九・四%、無職業・二%であり、妻の職業は、常用被雇用者一一・六%、自営業・自由業四二・一%、専業主婦四六・三%であった。結婚期間は五年未満が四二・一%で最も多く、五年以上十年未満の夫婦は二五・三%であり、両者を合わせると、九五組の半数以上を占める。

2. 夫婦間コミュニケーションの構造

(1) 因子パターンと解釈

夫婦間コミュニケーションの構造を明らかにするために、表一に示した十四の質問項目を用い、因子分析を行った。主因子法による因子分析を行い、固有値一以上の因子七個を選択した。因子数を六

ないし八に指定した分析も行ったが、七因子の時の因子の解釈が最も妥当であったため、七因子を採用した。この七因子の累積寄与率は六九・七%で、説明力はかなり大きい。次に因子間の相関があることを予想して、直接斜交回転を行った。その因子パターンが表二である。

以下にそれぞれの因子の解釈を行う。

第一因子は「夫のコミュニケーションの率直さ」と名づける。この因子は「明確・夫」、「ありのまま・夫」、「発言・夫」が高い因子負荷量を示し、夫のコミュニケーションの率直さに関する因子と言える。この因子が夫が自分の考えていることや自分の気持ちについて妻に話しかけ、妻に率直に表現するかどうかを測定するものである。

第二因子は「妻のコミュニケーションの率直さ」と名づける。この因子は「明確・妻」、「発言・妻」、「ありのまま・妻」、「伝える意志・妻」が高い因子負荷量を示す。第一因子は夫の率直さを示す因子であったが、この第二因子は妻に関するほぼ同一の質問項目が入っている。

第三因子は「コミュニケーションの摩擦」と命名する。この因子は「口喧嘩頻度・妻」、「傷つく頻度・妻」、「傷つく頻度・夫」と「口喧嘩頻度・夫」が高い因子負荷量を示す。この因子は夫と妻が文化的な違いで口喧嘩になる頻度と傷つく頻度を表すものである。

第四因子は「夫のコミュニケーションの情緒的共有」と命名する。この因子は「感情理解・夫」、「意味理解・夫」、「共感・夫」、

表2 コミュニケーション構造の因子パターン

	夫の 率直さ	妻の 率直さ	夫の 摩擦	妻の 共有	夫の 量	妻の 意欲	夫の 共有	妻の 共通性
「明確・夫」	.822	.002	-.065	-.098	-.052	-.203	-.002	.695
「ありのまま・夫」	.772	-.093	.050	-.007	-.196	-.005	-.014	.735
「発言・夫」	.633	.078	-.128	-.164	.146	.367	-.063	.746
「雑談・夫」	.340	-.140	.129	-.137	-.056	.315	-.024	.442
「会話の量・夫」	.313	.121	.302	-.262	-.013	.257	.244	.562
「明確・妻」	.080	.715	-.049	-.018	-.070	.009	-.113	.603
「発言・妻」	-.007	.674	.088	.030	-.164	-.017	.230	.516
「ありのまま・妻」	.083	.662	-.148	-.020	-.091	-.102	-.309	.653
「伝える意志・妻」	-.155	.656	-.096	-.099	.119	.215	-.101	.523
「口喧嘩頻度・妻」	.057	-.084	.796	.123	.047	.049	-.210	.710
「傷つく頻度・妻」	-.108	.253	.663	-.141	-.050	-.115	-.045	.586
「傷つく頻度・夫」	.037	-.111	.547	-.059	.020	-.003	.087	.336
「口喧嘩頻度・夫」	-.068	-.251	.526	-.151	.078	-.047	-.183	.487
「感情理解・夫」	.180	.059	.025	-.917	.133	-.105	-.047	.955
「意味理解・夫」	.063	.010	-.041	-.843	.006	-.042	-.114	.779
「共感・夫」	-.084	-.039	.137	-.683	-.328	.0002	.213	.676
「傾聴・夫」	.248	-.023	.178	-.477	.009	.111	-.073	.571
「会話の印象・夫」	.189	-.356	-.046	-.438	-.182	.397	-.095	.774
「雑談・妻」	.009	-.071	-.191	-.149	-.720	-.027	-.114	.576
「会話の程度・妻」	.069	.140	.056	.145	-.656	.095	.039	.533
「会話の量・妻」	.231	.149	.098	-.036	-.480	.103	-.009	.514
「会話の印象・妻」	.139	.173	.015	-.080	-.425	.193	-.109	.495
「伝える意志・夫」	-.098	.059	-.074	.101	-.091	.649	-.008	.434
「会話の程度・夫」	.363	.073	.087	.049	-.037	.397	.049	.450
「感情理解・妻」	.144	.201	.340	.071	-.213	-.015	-.558	.744
「共感・妻」	.006	.179	.254	-.195	-.046	.047	-.488	.569
「意味理解・妻」	-.007	.125	.355	-.023	-.225	-.0001	-.459	.596
「傾聴・妻」	-.110	-.095	.151	-.231	-.326	.158	-.365	.517
固有値	8.172	3.401	2.839	1.553	1.283	1.170	1.090	
寄与率	.292	.121	.101	.055	.046	.042	.039	

注：「夫の率直さ」は「夫のコミュニケーションの率直さ」の略語、「妻の率直さ」は「妻のコミュニケーションの率直さ」の略語、「摩擦」は「コミュニケーションの摩擦」の略語、「夫の共有」は「夫のコミュニケーションの情緒的共有」の略語、「妻の量」は「妻のコミュニケーションの量」の略語、「夫の意欲」は「夫の言語コミュニケーションへの意欲」の略語、「妻の共有」は「妻のコミュニケーションの情緒的共有」の略語である。以下も同じである。

「傾聴・夫」と「会話の印象・夫」が高い因子負荷量を示す。夫のコミュニケーションに含まれた意味と感情が妻に理解されているか、夫が妻との共感性が高いかどうか、妻がよく話を聞いてくれるかどうかという内容である。これに対応する妻側のものは第七因子に独立して出現した。

第五因子は「雑談・妻」、「会話の程度・妻」、「会話の量・妻」と「会話の印象・妻」が高い因子負荷量を示す。従ってこの第五因子は「妻のコミュニケーションの量」を示す因子といえる。この因子が日頃妻が夫とコミュニケーションする頻度、つまり妻のコミュニケーションの量を示したものである。この因子は妻側だけの因子であり、夫側に対応するものが独立して存在していない。

一方、第六因子には、「伝える意志・夫」が高い因子負荷量を示す。夫の言語コミュニケーションに対する意欲を表す因子で「夫の言語コミュニケーションへの意欲」とする。この因子は夫側だけの因子である。

第七因子は「感情理解・妻」、「共感・妻」と「意味理解・妻」が高い因子負荷量を示す。従って第七因子を「妻のコミュニケーションの情緒的共有」とする。

次に、因子分析の結果に基づき、コミュニケーション諸因子の尺度得点を作成した。

コミュニケーションの率直さ次元に関しては、夫と妻の回答別に「発言」、「明確」と「ありのまま」の三項目の合計得点を項目数三で割り、得られた値をそれぞれコミュニケーション率直さの得点

とした。同じようにコミュニケーションの情緒的共有に関しては、夫と妻の回答別に「感情理解」、「意味理解」と「共感」の三項目、「コミュニケーションの摩擦」因子に関しては、「口喧嘩頻度」「傷つく頻度」の二項目、「妻のコミュニケーションの量」因子は、「雑談」、「会話の程度」、「会話の量」と「会話の印象」の四項目、「夫の言語コミュニケーションへの意欲」因子は「伝える意志」という項目でそれぞれの平均点を各因子の尺度得点とした。

(2) 夫日本人・妻外国人夫婦と妻日本人・夫外国人夫婦のコミュニケーションの特徴

次に、国際結婚夫婦のコミュニケーションを夫日本人・妻外国人夫婦と妻日本人・夫外国人夫婦との二タイプに分け、それぞれの特徴を見てみたい。国際結婚夫婦のコミュニケーションは多くの社会的属性や言語能力によって異なることも考えられるが、本稿では紙面の制限もあるので、以上の二タイプの夫婦に限定することとした。なお、社会的属性が国際結婚夫婦のコミュニケーションに与える影響に関しては別の論文で扱う予定である。言語能力がコミュニケーションに与える影響は施(一九九九)を参照されたい。

ここでの分析には各因子の尺度得点を用いる。図一のように、夫日本人・妻外国人夫婦は妻日本人・夫外国人夫婦より夫の言語コミュニケーションへの意欲が高く、妻のコミュニケーションの量は多い。そして前者のほうが夫婦ともコミュニケーションは率直であり、コミュニケーションの摩擦が少ないため、夫と妻のコミュニケーション

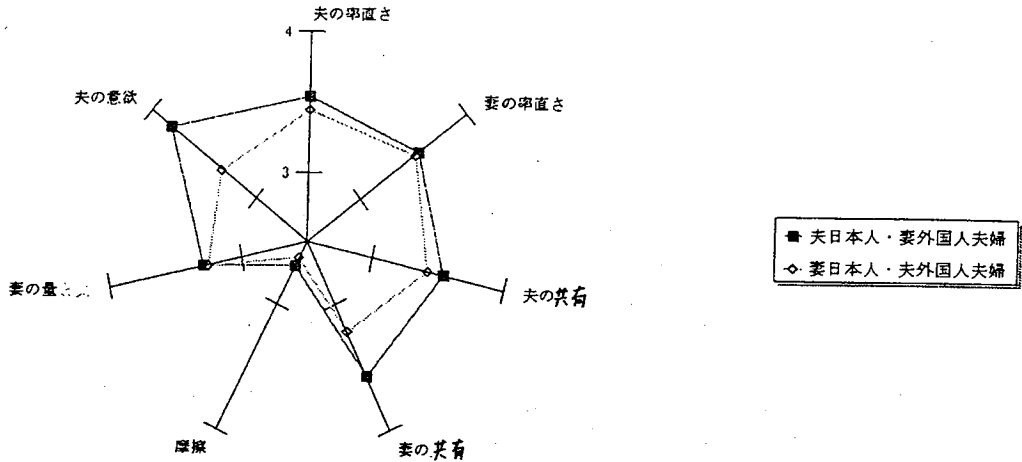


図1 夫日本人・妻外国人夫婦と妻日本人・夫外国人夫婦のコミュニケーション特徴

注：①日本人夫は外国人夫より「夫の言語コミュニケーションへの意欲」が高いことは統計的に有意である。
 ②外国人妻は日本人妻より「妻のコミュニケーションの情緒的共有」が高いことは統計的に有意である。

ヨンの情緒的共有が高いことが示された。すなわち、夫日本人・妻外国人夫婦のコミュニケーションは妻日本人・夫外国人夫婦よりはコミュニケーションが活発で率直であり、そしてコミュニケーションの情緒的共有も高いことが見受けられる。

3. コミュニケーションと夫婦の婚姻満足度との関係

(1) 婚姻満足度の尺度と特徴

夫婦の婚姻満足度を測定するために、「あなたは現在御主人（又は奥さん）との関係について満足していますか」という質問項目を用いた。回答の選択肢は「満足していない」「あまり満足していない」「大体満足している」「非常に満足している」の四つであり、それぞれ一点、二点、三点、四点と得点化した。

調査をした国際結婚夫婦の婚姻満足度には三つの特徴が見られた。第一の特徴は、表三に見られるように多くの夫や妻が現在配偶者との関係に満足していることである。

第二の特徴は、夫と妻の間で満足度に差が存在していることである。夫のほうが妻より現在の婚姻に満足している傾向が見られ、検定したところでは、その差が有意であることが証明された。ペアとなっている夫と妻の婚姻満足度については、夫の平均値は三・六八、妻は三・四九で、夫の方が高いことが示された ($t=2.81, df=93, p<0.01$)。

第三は、表四に見られるように夫日本人・妻外国人夫婦は妻日本

表3 国際結婚夫婦の婚姻満足度のクロス表

(%)

	妻			合計
	とても満足	大体満足	あまり満足していない	
夫 とても満足	46 (48.9)	21 (22.3)	2 (2.1)	69 (73.4)
夫 大体満足	4 (4.3)	13 (13.8)	3 (3.2)	20 (21.3)
夫 あまり満足していない	1 (1.1)	4 (4.3)	0 (0.0)	5 (5.3)
合計	51 (54.3)	38 (40.4)	5 (5.3)	94 (100)

表4 国際結婚夫婦のタイプ別に見た婚姻満足度

(人)

独立変数	夫の婚姻満足度の平均値	F値
夫日本人・妻外国人夫婦	3.875 (32)	5.883*
妻日本人・夫外国人夫婦	3.581 (62)	
独立変数	妻の婚姻満足度の平均値	F値
夫日本人・妻外国人夫婦	3.677 (31)	3.035*
妻日本人・夫外国人夫婦	3.387 (62)	

注①夫と妻の婚姻満足度を質問した項目の選択肢の得点化：「とても満足している」=4、「大体満足している」=3、「あまり満足していない」=2、「満足していない」=1

②*P<0.5

人・夫外国人夫婦に比べて、夫も妻も婚姻満足度が高いという特徴が見られた。

(2) コミュニケーション構造の諸因子が夫婦の婚姻満足度に与える影響

国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションと夫婦の婚姻満足度との関係を明らかにするために、まず、コミュニケーション諸因子の尺度得点を用いて、これらの諸因子と夫婦の婚姻満足度との相関関係を調べた。その結果は表五である。

夫の婚姻満足度と有意な正の相関関係が存在している因子は、「妻のコミュニケーションの率直さ」因子と「夫の言語コミュニケーションへの意欲」因子以外の五因子であり、これらの五因子の得点が高いと、夫の婚姻満足度も高くなっている。

一方、妻の婚姻満足度と有意な正の相関が存在している因子は「妻のコミュニケーションの率直さ」因子以外の六因子であり、これらの因子の得点が高ければ、妻の婚姻満足度が高くなっていることを示している。

次に、重回帰分析を用いて、コミュニケーションの諸因子が夫婦婚姻満足度へ及ぼす影響力を検証した。

表六は、夫と妻の婚姻満足度を従属変数とし、因子分析で抽出した七因子を独立変数としたステップワイズ方式による重回帰分析の最終的な結果である。

夫の満足度の説明変数として選択されたのは、「夫のコミュニケーション

表5 コミュニケーション諸因子間及び夫婦の婚姻満足度との間の相関

	夫の率直さ	夫の共有	夫の意欲	摩擦	妻の率直さ	妻の共有	妻の量
夫の共有さ	.487***						
夫の意欲	.108	-.006					
摩擦	.134	.354***	-.086				
妻の率直さ	.137	.099	.061	-.065*			
妻の共有	.196	.375***	.140	.437***	.218*		
妻の量	.428**	.387***	.262*	.145	.370***	.546***	
夫の満足度	.432***	.537***	.055	.295**	.085	.278**	.287**
妻の満足度	.293**	.410***	.342***	.272**	.187	.634***	.602***

注：*P < .05、**P < .01、***P < .001

表6 コミュニケーション諸因子の夫婦婚姻満足度への重回帰分析

	夫の婚姻満足度			妻の婚姻満足度		
	beta	t	p	beta	t	p
「夫のコミュニケーションの率直さ」	.247	2.42	<.05			
「夫のコミュニケーションの情緒的共有」	.433	4.254	<.001			
「夫の言語コミュニケーションへの意欲」				.181	2.237	<.05
「コミュニケーションの摩擦」						
「妻のコミュニケーションの率直さ」						
「妻のコミュニケーションの量」				.322	3.378	<.001
「妻のコミュニケーションの情緒的共有」				.428	4.666	<.001
重相関係数	.594			.724		
規定係数	.353			.524		

「夫のコミュニケーションの率直さ」因子と「夫のコミュニケーションの情緒的共有」因子と「夫のコミュニケーションの率直さ」因子である。この二つの因子によって夫の婚姻満足度の三五・三%が説明される。

妻の満足度の説明変数として選択されたのは、「妻のコミュニケーションの情緒的共有」因子、「妻のコミュニケーションの量」因子と「夫の言語コミュニケーションへの意欲」因子である。妻の婚姻満足度はこの三因子によって五二・四%が説明され、夫より説明率が大きい。

夫婦のコミュニケーションにおける相互行為的な側面である「コミュニケーションの摩擦」因子は夫と妻の婚姻満足度とは有意な相関が存在したが、重回帰分析の結果では婚姻満足度を規定していなかった。

この分析から第一に、夫の婚姻満足度より、妻の婚姻満足度のほうがコミュニケーション側面によって説明される程度が大きいことが分かった。第二に、夫の婚姻満足度は夫自身のコミュニケーション特性によって規定されるが、妻の婚姻満足度は妻自身のコミュニケーション特性以外に、夫側の特性である「夫の言語コミュニケーションへの意欲」によっても規定されて

いることである。すなわち、夫のほうは自己完結型であるが、妻の方は夫の要因も関与している他者関与型である。

4. まとめと考察

本稿では最初四つの仮説を立てたが、仮説一のコミュニケーションの量と婚姻満足度との関係に関しては、妻の場合は支持されたが、夫の場合はこのような因子が検出されなかったため、不明である。そして、仮説二の率直さと婚姻満足度との関係に関しては夫の場合のみ支持されたが、妻の場合は支持されなかった。仮説三の情緒的共有と婚姻満足度との関係は夫と妻のどちらの場合にも支持された。仮説四のコミュニケーションの摩擦と婚姻満足度との関係に関しては支持されなかった。

ここでは、夫婦にとつてのコミュニケーション、夫と妻にとつてのコミュニケーション、及び国際結婚夫婦にとつてのコミュニケーションの三つに分けて、考察を行う。

(1) 夫婦にとつてのコミュニケーション

現代人は家族に関係性を求めるようになった。かつては家族が男女が生きていく上での戦略であり、手段であったが、現代ではそれよりむしろ情緒的な絆を求め、与える場になった。例えば、パーソンズ（一九五六／訳一九八一）が家族が果たすべき機能がパーソナリティ機能に集約してきたと指摘している。また、ブラッド（一九

六七）は家族の近代化の指標として、夫婦の「伴侶性（companionship）」をあげている。「伴侶性」は、夫婦双方の親戚づきあいや友人との付き合い、夫婦のみのデートなどの共同行動、出来事や体験を伝える情報交換のコミュニケーションと、内面的・情緒的心情の吐露・理解・受容という情緒的コミュニケーションを指標にして測定されている。

このような特徴を持つ家族であるからこそ、夫婦間のコミュニケーションが人々の注目を浴びるようになる。というのも夫婦間コミュニケーションは、今まで異なった文化的・社会的環境、または家庭環境で生まれ育った男女を互いに分かり合える存在にし、二人の間の相互理解や一体感を高め、家族として仕上げていくことができるからである。

コミュニケーションを行うことによっては、夫婦が互いに相手の話を聞き、理解をし、共感を示すことができる。このようなことができた時は、人々が相手との絆、関係性を確認でき、婚姻満足度が高まる。それ故にコミュニケーションの情緒的・意味的相互理解は夫婦の婚姻満足度を規定すると解釈される。

(2) 夫と妻にとつてのコミュニケーション

夫の婚姻満足度は夫のコミュニケーション特性だけに規定され、率直にコミュニケーションを行うことと、情緒的共有が得られることが夫の満足度に影響を与える。一方、妻の婚姻満足度は妻の側面以外に夫の側面によっても規定される。つまり、妻にとつては情緒

的共有が得られること、夫とどの程度の量のコミュニケーションを持てること、更に夫が自分たちのコミュニケーションへの参加意欲^⑤によって、婚姻満足度が異なってくる。以上のことから、夫と妻のコミュニケーションは異なった働きを持ち、前者にとつてはコミュニケーションは自己の欲求を満たすところに重点を置かれた自己完結型のものであるが、後者にとつてはコミュニケーションは自己の欲求以外に夫婦の関係性にも重点が置かれ、夫である他者にも影響される他者関与型のものであると解釈できよう。

(3) 国際結婚夫婦にとつてのコミュニケーション

最後に、本研究では夫日本人・妻外国人夫婦のほうが妻日本人・夫外国人夫婦に比べて、コミュニケーションが活発で率直であり、コミュニケーションの情緒的共有が高いこと、さらに前者のほうが夫も妻も婚姻満足度が高いことが明らかにになった。その理由として夫のリーダーシップについて考えてみたい。

まず、国際結婚夫婦を取り囲む社会環境としては、多くの国際結婚夫婦は多かれ少なかれ社会から偏見を持たれたり差別されたりして(ヤンソン、一九八一／宿谷、一九八八／竹下、一九九七／新田、一九九二／桑山、一九九五)、孤立しがちな状態にあるので、外からの援助やサポートが満足に得られないことが多い状況を確認しておく。そして、家庭の外で働くことは外国人夫にとってはストレスの多いことであろう。そのストレスの多くは家庭内に持ち込まれ、妻にもストレスとして伝達されると同時に、癒やす役割も妻に否応な

しにのしかかってくる^⑥。すなわち、日本人妻は直接社会から差別を受けるとともに、夫によって持ち込まれたストレス、更に夫のストレスを癒やす役割という三重のストレスを負うことになる。一方、夫日本人・妻外国人夫婦の場合、夫は自国での慣れた環境にいたため、まず外からストレスを持ち込むことは外国人夫より少なく、更に外国人妻のストレス解消の手助けをすることが可能である。ここではまずこの二タイプの家庭における夫の立場が異なっていることが考えられる。すなわち、日本で居住していることに影響され、日本人の夫は家庭生活で積極性を発揮し、リーダーシップをとり、外国人の妻をリードしていく。一方外国人の夫は不慣れた環境の中でストレスを多く抱え、そのストレスを家庭内に持ち込み、日本人である妻に多く依存してリーダーシップをとることに多くの障害があることが考えられる。

近代社会では男女の仕事が分離され、男は一家の財的資源を調達することに、女は情緒的な資源を調整することに専念する。男女を夫婦として結びつけるものとして伴侶性が問われ、特に夫婦間のコミュニケーションが重要視されつつある。夫婦間コミュニケーションは夫婦の相互理解や一体感を高め、個人としての男女を家族として仕上げていく。しかし、夫婦間コミュニケーションにおいても女性に関係性に専念することが余儀なくされるが、男性の関係性への参加はいまだに少ない。ところが日本人夫のコミュニケーションへの意欲が高いことは、日本人夫の家庭生活への参加意欲の高さを示していると思受けられる。外国からきた妻をサポートし、又はリー

ドしていくことがただ経済的な面ではなく、日常生活の中でも必要であることが日本人夫を家庭生活に向けさせたのではなからうか。もちろんそれを可能にしたのは、日本社会を熟知していることから生じてくる能力と自信であると考えられる。

5. 課題

この夫婦を分析単位とした分析では、夫婦間コミュニケーションには夫婦相互行為的な因子「コミュニケーションの摩擦」が存在していることが明らかになった。この発見が夫婦間コミュニケーションには夫と妻の個人としてのコミュニケーション行為と共に、夫婦相互のコミュニケーション行為も存在していることを確認したものである。この因子を夫婦間の相互作用を表すものとして評価したい。ただし、夫婦のコミュニケーション構造には、夫婦相互行為的な因子以外に、夫と妻が対応する因子や、夫又は妻だけの因子も存在しているや夫婦相互行為的な因子が婚姻満足度を規定しないことであるので、夫と妻のコミュニケーションを別々に分析することも機会を改めてする必要がある。

注

- ① 国際結婚家庭でのコミュニケーションが困難であることは以下の論者によって指摘されている (Rohrich 1988, Markoff 1977, ボスバーク、一九八九)。国際結婚夫婦のコミュニケーションを困難に

している要因を大きく分けると、二つ存在すると言われている。第一は言語能力の不足であり、第二は異なった文化背景から生じる相手文化への理解不足である (鍋倉、一九九〇/ボスバーク、一九八九/箕浦、一九八七/桑山、一九九五/宿谷、一九八八/ヤンソン、一九八一/石川、一九九二)。この両者が絡み合い、国際結婚夫婦の意思疎通を困難にし、多くの誤解や衝突を招くと考えられる。

② 欧米においては、Rohrich (一九八八) が先行研究を踏まえた上で、異なる文化背景を持つ家庭では、自己開示と決定権についてのコミュニケーションが大切であると主張しているが、Rohrich は実際の調査による先行知見の確認やコミュニケーションの具体的な研究を行っていない。

③ 一九七九年に設立された。最初は外国人夫を持つ日本人妻の会であったが、現在では国際結婚当事者に加えて、一般の市民も会員になることができる。活動内容は、国際結婚家族の住みやすい生活環境作りや国際理解を目指しており、現在東京・名古屋・京都・大阪・福岡という五つの部会ごとに、主に月一回の集会や会報の発行を行っている。会員は日本全国から海外にまで分布している。

④ 「明確・夫」は「明確」という質問項目に関する夫の回答である。「夫」は夫の回答であることを表している。「妻」は妻の回答であることを表している。

⑤ 伊藤 (一九九六) は男たちが「黙っていても、妻は分かってくれている」という思いこみと男の多くがコミュニケーションが下手という原因で、男たちが「夫婦間の「ディスコミュニケーション」を作りだしている」と分析し、男たちの夫婦間コミュニケーションへの参加意欲の低さを指摘している。

⑥ 稲葉 (一九九八) の研究では女性がケアを提供する側であること

を明らかにし、「女性がケアを提供する」という状態が続くのであれば、女性にとっては結婚や出産は何らかのデメリットを持つものになり、男性にとっては結婚は相変わらずメリットが大きくなるという結論が得られている。

参考文献

- Blood, R. O. Jr. 1967 *Love Match and Arranged Marriage*. (田村健) 監訳
一九八三『現代の家族』培風館。
ポスバーク・ロバート 一九八九『国際結婚カップルの文化不適應—日米結婚を中心に』南博・佐藤悦子編『現代のエスプリ・カップルズ』二六
一—二三五—一四三 至文堂。
Fitzpatrick, M.A. 1989 *Between Husbands and Wives*. SAGE
Publications.
福里盛雄 一九八八『婚姻の破綻と夫婦のコミュニケーションに関する考察』
『沖繩法學』一六：九七—一二九
ホール・T・エドワード著 岩田慶治・谷泰訳 一九七六『文化を越えて』
TPSブリタニカ。
木田淳子 一九八七『家庭生活における夫婦の共同—分離(三) —中年夫婦
のコミュニケーションと夫妻間の理解』大阪教育大学紀要第二部門
社会科学・生活科学三六(二)：五七—六八
石川幸子 一九九二『国際結婚—地球家族づくり』サイマル出版会。
稲葉昭栄 一九九八『ジェンダーとストレス』『季刊家計経済研究』三七 家
計経済研究所。
伊藤公雄 一九九六『男性学入門』作品社。
近藤 裕 一九九八『家庭内再婚—夫婦の絆とは何か』丸善ライブラリー。
桑山紀彦 一九九五『国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニ
ッポンの家族』明石書店。
Markoff, R. 1977 *Intercultural marriage: Problem areas In*
W.S.Tseng, J.K.McDermott, & T. Marezki(Eds.) *Adjustment in*
intercultural marriage. Honolulu, HI: University Press of Hawaii.
Michel, A. 1978 *Sociologie de la Famille et du mariage*. 2 ed. 有地亭訳
(一九七八)『家族と婚姻の社会学』法律文化社。
箕浦康子 一九八七『異文化接触研究の諸相』星野・斎藤・菊池編『異文化
とのかわり』川島書店。
鍋倉健悦 一九九〇『日本人の異文化コミュニケーション』北樹出版。
Navran, L. 1967 *Communication and Adjustment in Marriage*. *Family*
Process 6
新田文輝著 藤本直訳 一九九二『国際結婚と私たち』明石書店。
Parsons, T. & R.F.Bales. 1956. *Family*. (橋爪貞雄他訳 一九八一)『家族』
黎明書院。
Rohrlich, Beulah F. 1988 *Dual-culture Marriage and Communication*.
International Journal of Intercultural Relations 12:35-44.
佐藤・H・バーバラ 一九八九『国際結婚における日本人親族との心理
関係』南博・佐藤悦子編『現代のエスプリ・カップルズ』二六二—
四四—一五三 至文堂。
佐藤悦子 一九九二『夫婦関係の活性化—コミュニケーションと親密性』
稲村博・佐藤悦子編集『現代のエスプリ・ニューセラピー』二八三—
至文堂。
施 利平 一九九二『国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力
の役割』『年報人間科学』第二〇号：四二—四三
宿谷京子 一九八八『アジアから来た花嫁—迎える側の論理』明石書店。
竹下修子 一九九七『国際結婚カップルの結婚満足度』『ソシオロジ』第四二
巻一—二号：四一
ヤンソン由美子 一九八一『国際結婚—愛が国境を越えるとき』PHP研究
社。

The Effect of Communication on Intercultural Married Couples' Marital Satisfaction

Liping SHI

The aim of this paper is to investigate the communication structure between partners in intercultural marriages, and hence to clarify the effect of communication on the couples' satisfaction. Although communication is one of the most important elements in intercultural marriages, the research on this subject is far from comprehensive. Based on this consideration, a survey was conducted by the author in 1997 and some of the results are presented in this paper. At first, We found that communication between Japanese husband and foreigner wife is activer, more straightforward, and higher in the emotional effect than the communication between Japanese wife and foreigner husband. Secondly, we found that husbands' satisfaction is affected by the emotional effect of husbands' expression and the husbands' communicative straightforwardness, while the wives' satisfaction is affected by the emotional effect of wives' expression, the quantity of wives' expression and the husbands' consciousness of verbal communication.

Key words

intercultural marriage, communication, marital satisfaction ,conflict, emotional effect